

## 独立行政法人福祉医療機構（WAM） 社会福祉振興助成事業完了報告

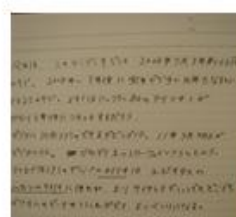
---

- ▶ ノートテイカー、パソコンテイカーの育成・派遣  
（福岡県内の私立大学2ヵ所・一般公募）
  - ▶ 障がい者並びにその支援者を対象とした相談  
（障がい学生、支援学生、保護者の方々）
  - ▶ シンポジウム
- 

### 講習会

---

- ▶ 福岡県内の私立大学2ヵ所・一般公募にて講習。
- ▶ 「障害理解（ベーシック研修）」（座学）
- ▶ 「ノート・パソコンテイク講習」（座学/実技）等



## 障害者並びにその 支援者を対象とした相談

- ▶ 実際に聴覚障害学生の支援をしている学生と会い、相談を受ける。
- ▶ ノートテイクーとして頑張っている学生の声や要望などをうかがい、講習会開催に繋げる。
- ▶ 保護者の方や障害学生の相談にも応じる。



## 講演

### 「自己決定権の尊重と情報保障」

講師／筑紫女学園大学教授  
山崎安則氏

## MCPの現在の活動

- ▶ 大学への講義(ノートテイク講習・手話講座)
- ▶ 相談員派遣
- ▶ 講習会開催(PCノートテイク講習会)
- ▶ 障害を持つ子どものための学習教室(研究・研修事業)
- ▶ 他団体視察、研修・勉強会
- ▶ 保護者の方との研修会
- ▶ 教育機関等での講演



## 4. 事業成果

### ①ノートテイク、パソコンテイクの育成・派遣

ノートテイク・パソコンテイク育成・派遣のための講習会の反応は3つとも高評価をいただくことができた。

これにより、初めて学生支援を考えるきっかけづくりの提供と、今後の学生団体へのサポート、助言、新たな支援方法の提供が可能となった。

また、広く一般へ講習会をすることにより、障がい学生支援を知ってもらうだけでなく、障がい児をもつ保護者の参加を促すことで、支援の方法を知ってもらう機会となった。

さらに、障害児を持つ保護者に対して、将来子どもの進学先でもある大学支援の在り方や、情報保障の受け方を現段階で知ること、その必要性を強く認識してもらえる結果となった。この事業においては、定期的に継続してほしいとの希望が多々あり、学期ごとの講習要望も高まった。

### ②障害者並びにその支援者を対象とした相談

相談事業においては、障がい学生、支援学生ともに状況に応じた支援方法の在り方について、コミュニケーションについて等の相談が中心となった。

これに対して具体的な事例とアドバイスをすることにより、支援に関する不安解消に繋がっていった。(アンケートからもそのような声をいただいた。)

また、一般公募で参加された、障がい児を持つ親の会の方たちからは、実際の大学の様子、支援についてなどの相談が中心となった。学生以上にニーズが高く、幅広く支援の方法やその後のケアを定期的に行うことができた。

## 実施したアンケート内容

### パソコンノートテイク講習会に関する アンケート

本日は、誠にありがとうございました。

このアンケートは、当団体の今後の活動の参考とさせていただくとともに、本事業の実施に必要な助成金（独立行政法人福祉医療機構（WAM）が行う社会福祉振興助成事業）の事業実施の参考とすることを目的に行うものです。

ご参加いただいた皆様からの忌憚のないご意見をいただきますよう、ご協力をお願いいたします。

《以下の設問で該当する欄に☑を入れてください》

#### 1. 本日の内容全般について、ご満足いただけましたか。（4択）

<input type="checkbox"/> とても満足	<input type="checkbox"/> 満足	<input type="checkbox"/> やや不満足	<input type="checkbox"/> 不満足
（→設問2へ）		（→設問3へ）	

#### 2. （1で「とても満足」「満足」を選んだ方）どのような点が良かったですか。

（複数回答可）

- 役立つ情報が得られた       日頃の生活や活動に役立った       スキルアップにつながった
- 他の参加者との交流・情報交換が図られた       抱えていた問題・不安の解消につながった
- その他 ー良かった点を具体的に教えてくださいー

[ ]

#### 3. （1で「やや不満足」「不満足」を選んだ方）どのような点が良くなかったですか。

（複数回答可）

- 役立つ情報が得られなかった       日頃の生活や活動の参考にならなかった
- スキルアップにつながらなかった       他の参加者との交流・情報交換ができなかった
- 抱えていた問題・不安の解消につながらなかった
- その他 ー良くなかった点を具体的に教えてくださいー

[ ]

# アンケート結果

実際に講習会を受けてもらった後、アンケートに答えてもらいました。  
この結果を受け、今後の改善、改良に繋げていきます。  
また、講習を受けての感想をさらに今後活かします。

ノートテイク・パソコンテイク講習会に関するアンケート 集計

場所 福岡県内A大学

実施日 平成24年10月

利用者数 39名

回答者数 39名 回答率100%

《設問1: 本日の内容全般について、ご満足いただけましたか。》

とても満足	24
満足	15
やや不満	0
不満足	0
計	39

《設問2: (1で「とても満足」「満足」を選んだ方)どのような点が良かったですか。(複数回答可)》

役立つ情報が得られた	36
日頃の生活や活動に役立った	14
スキルアップにつながった	16
他の参加者との交流・情報交換が図られた	3
抱えていた問題・不安の解消につながった	2
その他	1
計	72

感想・良かった点(抜粋)

聴覚障がい者の実体験を聞くことができ、今まで知ることのできなかつた世界を知れた。

ノートテイクを実践できるプログラムがあってよかった。

身近にテイクを必要とする方がいることを知れた。

講師の話し方、手話に明るさやユーモアがあり楽しく学べた。

## ノートテイク・パソコンテイク講習会に関するアンケート 集計

場所 福岡県内B大学

実施日 平成24年11月

利用者数 19名

回答者数 19名 回答率100%

《設問1:本日の内容全般について、ご満足いただけましたか。》

とても満足	10
満足	9
やや不満	0
不満足	0
計	19

《設問2:(1で「とても満足」「満足」を選んだ方)どのような点が良かったですか。(複数回答可)》

役立つ情報が得られた	17
日頃の生活や活動に役立った	11
スキルアップにつながった	11
他の参加者との交流・情報交換が図られた	2
抱えていた問題・不安の解消につながった	3
その他	0
計	44

感想・良かった点(抜粋)

大学に定期的に講習に来てほしい。支援についても気軽に相談したいと思った。

テイクの重要性や責任の重さを知り、しっかりとした技術を身に付けなければと思った。

情報保障について学ぶことが出来た。伝えていけるようにしたいと感じた。

この講習会に参加して、聴覚障がい者のイメージが変わった。多くの困難がある事を改めて知った。

場所	春日クローバープラザ		
実施日	平成24年11月		
利用者数	12名		
回答者数	10名	回答率	83.30%

《設問1:本日の内容全般について、ご満足いただけましたか。》

とても満足	8
満足	2
やや不満	0
不満足	0
計	10

《設問2:(1で「とても満足」「満足」を選んだ方)どのような点が良かったですか。(複数回答可)》

役立つ情報が得られた	8
日頃の生活や活動に役立った	4
スキルアップにつながった	0
他者の参加者との交流・情報交換が図られた	5
抱えていた問題・不安の解消につながった	3
その他	0
計	20

良かった点・感想

Iptalk の使い方が分かった。自分のパソコンで練習したいと思った。

地域の学校に子供が通っていないため、大学の情報保障の手段を知れた。

テイクのやりがいを感じた。やってみようと思った。

講習会がとてもわかりやすく、講習会を受けてテイクに興味を持った。

## 講習会の感想

MCP主催の講習会は、大変参考になりました。

偶然にも、ノートテイクを始めた時期と講習会の時期とが重なり、「講習会に参加し得たものを即座に活かしていける絶好の機会だ！」という思いから積極的に参加させて頂きました。ノートテイク専用の用紙やペンがあること、主テイクとサブテイクが協力して交互にテイクするやり方が疲れず理想的であること、ノートテイクと箇条書き、メモとの違いなど、初めて知ることばかりで目から鱗でした。

大きめの読みやすい文字で一行間隔を空けて書いていく、略字を使う、カタカナやひらがなも駆使する(その場合、下線を引く)といったノートテイクの基本も押さえることができたことも、その後の支援にとっても役立ちました。簡単なノートテイクの練習でも、まずは自分でやってみて、それから、コツを教えてもらい、再度チャレンジしてみると、箇条書きやメモに近かった自分のノートもかなりノートテイクらしくなり、より聞き取れた内容が増えていたのも実感することができ、とても嬉しかったです。

また、りんご→バナナ→メロンなど、言われた内容を記憶していき、一つ前のものを書き留めるという暗記ゲームも、聴く力と記憶力を鍛えることに繋がるので、ノートテイクをする上で楽しい練習法であると思いました。

講習会后、私はさらにもう2つ別の科目も担当させて頂くようになりました。講習会前と変わらず、支援学生は私を含めまだ4人しかいないのが現状です。

先にお伝えした社会福祉学科3年の女子学生さん、私の友達で英文学科5年の女子学生さん、そして、当事者が直接お願いして支援されるようになったという社会福祉学科2年の男子学生さん(この中で一番長くノートテイクをされてきた方)と私(英文学科5年)です。

しかし、講習会后、私たちの取り組みに興味を持って下さる学生さんは、わずかながら増えてきたようでした。興味をもってくれた学生さんは、講習会の回収アンケートに氏名とアドレスを記載することになっていたと思いますが、その学生さん方に保健管理室の先生がその後、直にご連絡を取って下さった結果、講習会が行われた昨年10月以降に3回行ったノートテイク支援学生たちのランチ会のうち、最後の一回に、3人の学生さんが集まって下さいました。

先月末、後期試験を目前に控えた最後の講義でディベートが予定されていました。それまで、一人でノートテイクをさせて頂いておりましたが、初めてのディベート、一人でテイクをする自信がなく少し不安に思っていたところ、ランチ会に来て下さったある女子学生さんにお声かけをして下さいました。

そして、当日、私はその方とペアでノートテイクをさせて頂くことができたので、大変助かりました。その学生さんは今春に卒業されるのですが、「卒業前に一度はしてみたいと思っていたノートテイクを最後にできてとても嬉しかったです」と言って、テスト前の大変忙しい時に快くお受けして下さいました。



このように、私や他の学生さんも含め、講習会を機にノートテイクに関心を持ち、やってみようと思って下さる学生さんは結構いらっしゃるようで、今後も増えてくることが大いに期待されます。

私と私の友達ももう卒業するので、春には支援学生が2人になってしまいます。ノートテイク支援は今、着実に拡がりを見せています。今後もこの勢い止めることなく、さらに盛り上げて行ってほしいです。

今後も、MCPのみなさんにもご指南を乞いながら、一歩ずつ大学でのノートテイク支援がより良いものになっていくことを願っています。私自身も、卒業しても何らかの形でこの取り組みに関わらせて頂けたらと考えています。

講習会を受けた支援学生より                      抜粋

個人情報が特定される部分は、除いて掲載しております。

# 学生からの感想・要望等(抜粋)

## テイクをしてみたの感想

テイクを始めてみて、最初のうちは戸惑いばかりでした。まず1つは、利用学生とのコミュニケーションです。今では簡単な手話で話すことができるようになりましたが、初めの頃は、なかなか会話が通じなかったので「名前は？学部は？」程度しか話せず、もどかしかったのを覚えています。そのせいで、利用学生の希望を聞かないまま、座席の位置や、文字の大きさ等を勝手に決めてしまっていた反省点があります。

2つ目は、不測の事態が起こったときの対処の仕方に戸惑いました。例をあげます。ノートテイクがスタンバイしていて利用学生が30分経っても来ないときは退出していいことになっています。しかし、100人ほどの学生が先生の熱弁を静かに聞いている中、一番前の真ん中の席でパソコン機材を片付けるのが気が引けて、そのまま90分間座ったまま動けなくなってしまう日があり、どうすればいいのか分からなくなる時がたびたびありました。(ルール通り退室すれば良かったのですが、その場で過ごしました。)

また、先生が事前説明もなく字幕のない映像を流し始めたときや、記号や表を使っの板書をしたとき(言葉はPCで、板書はミニホワイトボードでテイクしました)、ディスカッションで意見が素早く飛び交うとき、利用学生が教壇に立って発表し質疑応答を受けるとき、パソコン2台がどうしてもうまく動かないときなど、「こんなときはどうすればいいのか？」と戸惑ってしまうときが多くありました。

## 今後の希望

定期的な学習会や反省会を開いての意見交換が必要だと強く感じます。疑問や戸惑いを感じたときに、どう対処すればいいか、今まで相談できないまま過ごしてしまいました。

利用学生の意見を聞かないまま、「こういうときは、こうすればいいだろう」と決めてしまいがちなので、利用学生の意見をもっと取り入れる工夫が必要だと感じます。

また、そのような時にもっと定期的にMCPIに入ってもらえたらいいなと思います。上記のような(テイクの感想)トラブルのほかに起こりうるトラブルの回避法などをもっと知りたいです。

## テイクをしてみたの感想

- ・結構楽しくて、もっとやりたいと思った。手がしんどくなる時もあったが楽しかった。
- ・授業の内容も書いてる方が頭に入ってきた。
- ・どこを書いたらいいのか、何を省いたらいいのかと思うことがあった。  
本当にこれでいいのかと悩むこともあった。  
(最初は書けた事に対する喜びや安堵が大きかった)

## 講習会を受けての感想

- ・時々開いても、内容や出席者も変わっていたので、定期的に開けるのが理想だと思った。

## 今後の希望

- ・テイクも当然のサポートになったらいいと思う。
- ・利用者が利用しやすい制度になると良い。
- ・テイカーがもっと気軽に始められるような制度になると良い。  
(テイクの仕方や、体験をしても尻込みしてしまう人が多い)
- ・他大学のノートテイカーや、地域の要約筆記団体が集まれるような機会があったらいいかもしれない。

## 5.まとめ

今回の助成を受けて、この障がい学生支援における課題が見えてきた。

まず、障がい学生、支援学生、大学の3つの方向性に違いがあるということ。講習会后、積極的に支援体制を築き始めた学生グループもあったが、それに関して大学側からの対応がなされておらず、障がい学生も一部のみが参加するという事態になった。障がい学生同士のコミュニティーや支援者の集まりもなく、MCPの役割として、集まる場の提供(コミュニティーの形成)、継続的な支援(講習会やフォローアップ)を今後の活動でも継続をしていく必要があることが明確化になった。それだけではなく、この3つのベクトルが同じになるためにも継続支援が可能となるような体制を築き、大学側と交渉する必要があるように感じた。また、障がい学生支援には、何より「継続」が大事である。一方、大学側として、障がい学生の継続入学がないこと、支援を継続するための予算問題等が課題に挙げられるため、これについては今後もどのような方法で大学の中で支援を継続していくべきか考察していく必要がある。

また、学生による支援を行っている大学の現状も、相談員などを通して把握することができた。

明確な理論講習を受けず先輩から伝えられた方法だけで支援を行い、また後輩に伝えるという悪循環とも言える流れもあった。それにより学生たちの支援に関する不安感が増加し、支援の質にも影響が出ている。講習会等を学生だけで行うのではなく、外部の専門知識のある者と共同にて、定期的に講習会、フォローアップ講習会(継続的支援)を行い支援の質の向上が必要と感じた。さらに、学生が学生の悩み相談を聞くことも大事ではあるが、それ以上に専門員による相談だからこそ、客観的な判断と、支援者や障がい学生が悩む本質に答えられる部分も大いにあると感じた。公的な要約筆記団体では、主に支援技術における不安は解消してもらえるかもしれないが、支援者や障がい学生の悩みはその範囲を超えたところにまで及ぶ。そういった悩みや不安は、MCPだからこそ解決できることが多くあるのではないかと考えられた。(MCPは実際に学生テイクをしてきた者、受けてきた者で構成されており、メンター制度を取り入れている。\*1)

講習会に初めて参加した学生に感想を聞くと「テイク支援は難しい」「自分には出来ない」という意見や本音を多く聞く。(講習会を受けた者の6割近くはこの考え方に至ることが多い。)これにより支援者の減少、支援が出来る人は限られた人という印象が強くなり、自分には関係がないと、講習会を受けた後、活動をしない学生がほとんどである。

こうした結果より、障がい学生支援における、学生支援が浸透せず、公的機関からの派遣等で、障がい学生支援が進められているケースが非常に多い。大学内の資源の活用、活性化としてみても非常にもったいない話である。

障がい学生を学生が支えることには大きな社会的意義がある。

1つは、障がい学生自身の発信力と支援の必要性、障がいの認識を深めさせることで、社会へ出た際に、人の手を借りずに、自分から何かを求めていく姿勢ができる。また、支援技術を身につけることで、自ら支援者を育成し、サポートの養成を依頼することができる。

こうすることで、就職後、就職先が障がい者雇用後の支援方法について調べる手間や、雇用者数を減らすということが回避できる。

もう1つは、支援学生自身が障がい学生と向き合うことで、障害理解を深めることができ、社会へ出た際、支援方法を身につけた人材が今後さらに障がい者雇用率を促進することが出来る。そのような点を踏まえ、障がい学生を同じ大学生が支援することは双方にとって意義深いことであると考えられる。障害が特別なことではなく社会の中で共に生きるという実践を大学時代から身をもって行うチャンスとして捉えたい。

少子化と言われ、さらに高齢出産等から障がい児の出生率が高まってきた今、障がい者と深く関わることが出来るのは、大学という限られた場所だからこそ、長く、深く関わることが出来るのではないかと考えられる。

MCPは学生の不安を取り除き、細やかなケアと、正確なコーディネートを支援学生、障がい学生にすること、また、支援について考える機会を提供することが必要であると考えられる。

さらに、支援学生に対するケアや対価が等しくないことも現状にある。日本全国を見渡すと、支援を単位制にしていたり、有償ボランティアとしお金を払っていたりしているところも多い。しかし、まだ無償で行っているところが多く、支援学生に対するケアも少ない。支援には7時間以上の講習と、その後のスキルアップを図るなど、技術的なことを提供しているため、無償で行うには限界があると考えられる。支援者に対するケアの仕方を考えることで支援者が増えまた、責任を持って取り組むことで、より支援の質も上がるのではないかと感じた。

来年度からはMCPも大学側に、支援者へ対するケア、対価の必要性を提示していく必要があると考える。また、それらが大学だけの負担になることを避けるため、ケアに対しては障がい学生、支援学生のみではなく、大学関係者に対しても、細やかなアドバイス等を提示できるよう、大学、学生、MCPとの柱の強化をしていく必要があると考えられる。

こうしたことから、来年度は、以下についてさらに事業を強化し、進めていこうと考える。

- ・大学学生による障がい学生への情報保障支援のルーチン化 \*2
- ・大学、学生、MCPとの3つの柱で、それぞれの負担を軽減させ、支援の継続性を図る
- ・障がい者の受験を積極的にサポートし、そのための学習基盤となるものを定着させる事業を展開し、継続入学を目指す(障害児のための学習支援教室等)
- ・定期的に講習会を行い、多方面から参加が出来るよう促す
- ・シンポジウム等を開催し、広く地域に障がい学生支援の理解を求めていく

この事業を通して見えた課題を、この先々に活かし、九州における障がい学生支援がさらに広がるよう、活動を行っていこうと考える。

\*1 メンター制度 賢明で、信頼のおける相談相手。MCPでは、年齢の近い先輩スタッフ(支援経験者)のことを指します。

\*2 ルーチン化 習慣化させる。

## 6.終わりに

この度、平成24年独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業の助成を受け、障がいのある学生への学習支援事業を行ってまいりました。

2012年2月に設立したばかりの当法人にとって、これは法人化して初の助成事業でした。助成事業では多くの学生の皆様、そして地域の皆様と関わることができ、大変うれしく思っております。

私事ですが、大学在学当時、障がい学生に対する合理的配慮は決してきちんとされているという状況ではありませんでした。バリアフリーとは言い難く、障がい学生本人が、「自分の力で頑張る」と言われていた時でした。聞こえない学生にとって、耳で聞く授業に果たして頑張れるものはあるのでしょうか。

聞こえない学生は、大抵高校までは自力で、独学で学ぶことが可能です。板書と教科書、参考書を猛勉強すれば乗り切ることが出来るからです。しかし、それでも限界は大いにあります。一方、専門的なことを学ぶ高等教育機関は、独学では確実に難しいものとなってきます。そのような場において、聞こえない人に、「自分の力で頑張る」と言うのは、「頑張る聞いてください」と無理難題を言っているようなものです。聞こえないから「ノートテイク・パソコンテイク」という文字媒体や手話が必要なのです。

聞こえない学生にとって、テイクという手段は大変ありがたく、それがなければ授業にすら参加が出来ません。テイクがあるからこそ授業参加が可能になるのです。それをご理解いただけたら大いにうれしく思います。

皆さまに見守られ、支えられて行ってきた助成事業ですが、ここで終了するのではなく、今回の助成事業をさらに今後に活かし、引き続き継続してまいりたいと思います。講習会、相談等行ってまいりますので、必要な際はぜひMCPにお声掛けくださいますよう、お願い申し上げます。

MCPは「学びたいを支援する」が、ミッションです。障がいを持った方はもちろん、支援に関わる方々、全ての方の「学びたい」を、これからも支援し続けてまいりたいと思います。

まだまだ未熟ではありますが、皆さまに支えられ、育てていただきながら、MCPが大きく成長し、少しでもお役にたてるよう努めてまいります。これからも、一緒にMCPと歩んでいただけたらと思います。今後も、どうぞMCPを引き続きご支援、ご指導いただきますよう、よろしく願い申し上げます。

特定非営利活動法人障がい者相互支援センターMCP  
事務局 一同



## 特定非営利活動法人障がい者相互支援センターMCP

〒812-0046  
福岡市博多区吉塚本町13-50 福岡県吉塚合同庁舎5階  
福岡県NPOボランティアセンター(連絡用メールボックス)

メールアドレス [mcp\\_jimukyoku@yahoo.co.jp](mailto:mcp_jimukyoku@yahoo.co.jp)  
ホームページ <http://mcp2012.web.fc2.com/index.html>

この報告書は独立行政法人福祉医療機構の助成金で作成しております





